

韓国における学部生を対象にした情報リテラシー教育プログラムの設計および効果

Youn You-Ra (Dong-Eui University) yryoun@deu.ac.kr

Lee Eun-Ju (Dong-Eui University) ejulee@deu.ac.kr

1. 序論

1) 研究背景および目的

情報社会で生存するためには、自分に必要な情報を活用できる能力、即ち情報リテラシー(Information Literacy)が必要である。情報リテラシーは、情報ニーズの認識から、情報源へのアクセス、必要とする情報の検索や評価、効率的な利用、情報利用に対する法・倫理的な問題などの理解までの総合的な能力を指す用語として使われている¹。このような情報リテラシーを育むためには、体系的な教育が必要である。

アメリカやイギリスなどの国では、小学校から大学までの情報リテラシーの標準を制定しており、情報リテラシー教育プログラムの開発や学習評価をするためのツールとして利用している²。しかし、韓国では、小・中・高等学校で情報リテラシー教育を選択科目として設置しているが、大学では情報リテラシー教育に関する基準や標準などを備えていない。

そこで本研究では、韓国の学部生を対象にして、情報リテラシー教育プログラムを設計、実践した後、その教育プログラムが学部生の情報リテラシーを向上させることに、いかなる影響を与えたのかを検討した。

2) 研究内容および方法

3つの段階で研究を行った。まず、先行研究を分析して、情報リテラシー教育プログラムを設計した。次に、釜山地域にある2つの大学で、101人の学部生を3つのクラスに分けて、15週間の情報リテラシー教育プログラムを運営した。そして、教育プログラムを受ける前・後にアンケート調査を行い、プログラム参加者の情報リテラシー能力の上達度を測定した。

2. 情報リテラシー教育関連の研究動向

韓国の研究動向の調査は、二つの基準で行った。一、図書館情報学科で行われた研究だけを取り上げた。そのために、韓国の図書館情報学分野の学会誌、四誌³を調査対象にした。二、韓国国立国会図書館の検索用語集を参考にして「情報リテラシー」と関連するキーワードを抽出した。キーワードは「情報リテラシー」「情報活用能力」「情報教育」「情報利用教育」などである。検索のために使ったデータベースは国立国会図書館と韓国教育学

術の検索データベース(RISS)である。これらのキーワードに該当する論文は52件であった⁴。

情報リテラシー研究は、1994年にYooが学校図書館での情報教育の必要性に関する論文を発表して以降、継続的に行われている⁵。その中でも、学校図書館を対象にした研究が17件(32.7%)で一番多く、学部生や大学図書館を対象にした論文は16件(30.8%)で次に多かった。それらの論文の内容を分析すると、2007年までに行われた主なテーマは、学部生の情報リテラシーの実態や影響要因に関して分析し、大学図書館での情報リテラシー教育の強化を主張したものであった。2008年からは、情報リテラシー教育モデルを開発しようとする研究が多くなっている。特に、2014年で行われたHanの研究は、情報リテラシー教育を大学図書館で限定せず、大学全体の教養教育の一つとして位置づけることを提案している⁶。

3. 情報リテラシー教育プログラムの設計

1) 情報リテラシーの関連モデルと標準

情報リテラシーに関する研究が多く行われ多様な関連モデルが1980年から提案されているが、主なモデルとして、Eisenberg & Berkowitz(1988)のBig6Skills, Kuhlthau(1987)のInformation Search Process Model(以下ISPモデル)がある。

Big6Skillsモデルは、情報検索の段階を6段階のプロセスで構成しており、現在、韓国の小・中学校等の情報リテラシー教育でよく利用されている。ISPモデルは、同じく6段階のプロセスで構成されているが、学習者の情報ニーズを明確にすることに重点を置いているのが特徴である(表1参照)。

表1 Big6skillsとISPの比較

	情報ニーズ の把握段階	→検索段階	→評価段階
Big 6Sk ill s	①課題定義	②情報探索戦略 ③情報発見とアクセス ④情報利用 ⑤総合	⑥評価
ISP	①初め ②選択 ③調査 ④公式化	⑤収集	⑥表現 (評価)

一方、情報リテラシーの標準には、国や権威のある機関で発表されたものがある。まず、IFLAでは2006年に‘Guidelines on Information

Literacy for Lifelong Learning' ⁷を発行し、アクセス、評価、利用という3つが情報リテラシーを構成する中核的な能力であると説明している。アメリカのACRL (Association of College and Research Libraries) が2000年に発表した 'Information Literacy Competency Standards for High Education' ⁸では情報リテラシーを5つの領域に区分し、22項目の指標および87個の成果項目を提案している。オーストラリアのCAUL (Council of Australian University Libraries) は 'Australian Information Literacy Standards' ⁹を2001年に発表した。そこでは情報リテラシーを7つの領域に区分し、25個の成果項目や事例を述べている。

二つのモデルと三つの標準を参考にして、情報リテラシー教育で扱うべき中核的な領域を、(I)情報ニーズに対する自己認識、(II)情報探索とアクセス、(III)情報分析と評価、(IV)情報利用、という4つに区分した(表2参照)。

表2 情報リテラシーの中核的な領域

中核領域		成果内容
I	-情報ニーズに対する自己認識	-情報ニーズを認識し、必要な情報の特性や範囲を決定できる。
II	-情報探索とアクセス	-アナログからデジタル情報までの主な情報源の類型を把握できる。 -必要な情報に効果的・効率的にアクセスできる。
III	-情報分析や評価	-得られた情報および情報源を批判的に分析・評価できる。
IV	-情報利用	-情報を効果的に組織し、目的に適切に利用できる。 -情報活用に対する法的・倫理、文化的な問題を理解でき守る。

2) 教育プログラムの設計と運営

先行研究の分析によって、教育プログラムを設計した。韓国の大学で活用できるプログラムを設計するために、15週間で行うように構成した¹⁰。1週間の授業時間は3時間として、合わせて45時間の教育プログラムである(表3参照)。プログラムは7週まで理論を学習し、8週から学んだ理論をもとにして、実際に実習を行うように構成した。

表3 情報リテラシー教育プログラムの概要

領域	週	教育内容	詳細事項
I	1	情報社会と情報	-情報社会の概念および特徴 -情報社会の肯定的・不定的な側面 -情報社会での情報の意味
	2	情報活用と情報活用能力	-情報活用と情報活用能力の概念 -情報活用のプロセス

アンケート調査 (前)			
II	3	情報資源の類型と特性	-情報資源と情報源の概念 -情報資源の類型(1次、2次情報資源) -情報源の類型
II、III	4	情報資源の探索戦略 I	-情報探索のプロセス -検索式の活用方法
	5	情報資源の探索戦略 II	-検索結果の評価方法 -再検索戦略の構築方法
IV	6	情報倫理と著作権	-情報倫理の概念 -著作権の理解
	7		総合纏め-理論編
II、III	8	インターネットの情報探索の実習 -図書館	-韓国の国立図書館 (国立中央図書館、国立国会図書館実習)
	9		-韓国デジタル図書館
	10	インターネットの情報探索の実習 - 専門・総合ポータルサイト	-韓国教育學術情報源の RISS -韓国科学技術情報研究院のNDL -韓国言論振興財団の KINDS
	11		-国家記録院のNarakiroku -NAVER / GOOGLE
	12	インターネットの情報探索の実習 (国内・外学術DB)	-DBPia / KISS
	13		-KyoboBookのKyoboScholar -ScienceDirect / Emerald
III、IV	14	情報資源の分析と活用	-情報分析(批評的な読解など) -情報活用の方法(レポートの作成法)
	15		-実習の纏め
アンケート調査 (後)			

プログラムの運営は2015年3月から6月まで、101人の学生を対象に行った。そこから、アンケート調査を通じて、自ら情報リテラシーを評価するようにした。アンケート調査は2回実施した。最初の調査はプログラムの参加者が情報リテラシーの基礎的な概念を理解してから行い¹¹、2回目の調査はプログラム終了後に行った。

4. 教育プログラムの効果分析

アンケート調査の質問紙はプログラムの構成と同じく4つの領域に分けて、23項目の質問で構成した。各質問項目は、「大変そうである」から「全然そうではない」の5件法で回答を求めた(表4参照)。各質問について、5件法の各頻度割合と平均値を計算(「大変そうである」5点、「全然そうではない」1点)した後に、2回の調査で回答数の頻度割合の分布に差があるかどうかカイ二乗検定を行った。その結果、95%の信頼レベルで、「情報ニーズ」領域の1項目以外のすべての項目において有意な差があり、平均値も増加していることから、

プログラムの効果がみられた(p≤0.05)。これらの結果から、本研究で設計した情報リテラシー教育プログラムが学部生の情報リテラシーを向上させるのに肯定的な影響を与えたことが判断できる。領域別の結果をまとめると以下のようなものである。

(I) 情報ニーズの自己認識

プログラム終了前・後で、「日常生活と学習活動を行う時、必要な情報の範囲と特性を正確に把握できる」(表4の②)の平均値が3.0

9から3.69に増加した。また、「情報ニーズを解決するための情報の区別」(表4の③)の平均値が3.41から4.01に、「必要な情報を文章で表現」(表4の④)が3.13から3.69に増加していた。しかし、「日常生活および学習活動を行う時、情報の必要性をいつも感じる」(表4の①)に関する項目は有意な差がなく、効果がみられなかった。今後、もっと明確な要因分析が必要であると判断した。

表4 情報リテラシー教育前・後のアンケート結果 (単位=%、n=101)

領域	質問項目	教育前後	平均値	全然そうではない	そうではない	普通である	そうである	大変そうである	有意確率
情報ニーズの自己認識	①日常生活および学習活動を行う時、情報の必要性をいつも感じる	前	4.06	0.0	0.0	12.9	53.4	33.7	0.384
		後	4.00	1.0	0.0	16.8	57.4	24.8	
	②日常生活と学習活動を行う時、必要な情報の範囲と特性を正確に把握できる。	前	3.09	0.0	18.8	54.5	25.7	1.0	0.000
		後	3.67	0.0	4.0	32.7	55.4	7.9	
③情報ニーズを解決するために、どのような情報を収集すべきなのかを知っている。	前	3.41	2.0	6.9	41.6	47.5	2.0	0.000	
	後	4.01	0.0	0.0	14.9	63.3	15.8		
④必要な情報を明確に文章として表現できる。	前	3.13	1.0	24.8	37.6	33.6	3.0	0.000	
	後	3.69	0.0	4.0	27.7	63.4	4.9		
情報探索	⑤情報資料の類型(単行本、学位論文、レポート、年鑑など)を明確に区別できる。	前	2.55	6.9	43.6	36.6	12.9	0.0	0.000
		後	4.05	0.0	2.0	15.8	57.4	24.8	
	⑥情報ニーズに適切な情報資料があるところ(情報源)をよく知っている。	前	3.33	5.0	33.7	50.5	10.8	0.0	0.000
		後	3.87	0.0	1.0	15.8	62.4	20.8	
	⑦必要な情報を探索する方法をよく知っている	前	3.40	1.0	17.8	55.4	23.8	2.0	0.000
		後	3.87	0.0	1.0	12.9	63.3	17.8	
	⑧単純検索、詳細検索、ディレクトリー検索などの検索方法を区別できる。	前	1.86	5.9	33.6	32.7	21.8	1.0	0.000
		後	3.01	0.0	1.0	18.8	57.4	22.8	
	⑨情報を検索する時、著者、署名、出版社などの検索項目を適切に使用する。	前	3.16	5.0	20.7	31.7	33.6	4.0	0.000
後		4.05	0.0	2.0	12.8	62.4	22.8		
⑩情報を検索する時、検索式(AND, OR, NOTなど)をよく使用する。	前	1.84	36.6	44.5	14.9	4.0	0.0	0.000	
	後	3.00	3.0	31.7	32.7	26.7	5.9		
⑪検索を行った後、不足な情報に関しては再検索や検索語の修正をよく行う。	前	3.36	4.9	16.8	24.8	44.6	8.9	0.029	
	後	3.72	0.0	6.9	26.7	53.5	12.9		
⑫検索の結果が不足の時、より包括的な結果を求めるための方法をよく知っている。	前	3.34	2.0	39.6	40.6	17.8	0.0	0.000	
	後	3.99	0.0	1.0	17.8	63.3	11.9		
⑬検索の結果が多すぎる時に、検索結果を縮小するための方法をよく知っている。	前	2.86	5.9	25.8	46.5	19.8	2.0	0.000	
	後	4.07	0.0	1.0	11.9	66.3	20.8		
情報分析や評価	⑭結果の書誌データ(題目、著者、発行情報、目次など)を明確に理解している。	前	2.90	5.9	27.7	44.6	20.8	1.0	0.000
		後	3.87	0.0	1.0	17.8	65.4	15.8	
	⑮結果が、自分の情報ニーズを解決するために有用であるのかをよく判断できる。	前	3.40	0.0	8.9	43.6	46.5	1.0	0.000
		後	3.87	0.0	3.9	18.8	63.4	13.9	
	⑯収集した情報資料の本文の内容を読解するのに問題がない。	前	3.21	1.0	14.9	49.5	31.6	3.0	0.016
後		3.57	0.0	6.9	35.7	50.5	6.9		
⑰収集した情報資料の本文の内容を読んで、タイトル、抄録、キーワード、本文、結論などをよく区別できる。	前	2.90	1.0	31.7	44.5	21.8	1.0	0.000	
	後	3.87	0.0	3.0	25.7	52.5	18.8		
⑱収集した情報資料の本文の内容を読んで、自分の情報ニーズに適切な情報を取り出すことができる。	前	3.33	0.0	8.9	49.5	41.6	0.0	0.000	
	後	3.87	0.0	2.0	19.8	67.3	10.9		
情報利用	⑲情報資料を入手する時、多様な方法(貸し出し、ダウンロード、図書館間貸し出しなど)をよく知っている。	前	2.66	5.9	43.6	29.7	19.8	1.0	0.000
		後	3.85	0.0	2.0	28.7	51.5	17.8	
⑳情報資料に対する著作権の条件などをよく理解してい	前	2.38	19.8	43.5	23.8	6.9	1.0	0.000	

	る。	後	3.87	0.0	5.0	23.8	54.4	16.8	
	㉑情報資料に対する引用形式をよく知っている。	前	2.38	8.9	49.5	36.6	5.0	0.0	0.000
		後	3.87	0.0	5.0	19.8	58.4	16.8	
	㉒得られた情報資料を分類し管理することがよくできる。	前	2.86	3.0	28.7	47.5	20.8	0.0	0.000
		後	3.74	0.0	4.0	25.7	62.4	7.9	
	㉓収集した情報資料を自分の情報ニーズを解決する時や、レポートを作成する時、適切に活用できる。	前	3.34	2.0	11.9	39.6	43.5	3.0	0.000
		後	3.99	0.0	1.0	13.9	70.3	14.8	

(II) 情報探索

情報探索の領域では、すべての項目で有意な差がみられた。具体的には、「情報資料の種類(単行本、学位論文、レポート、年鑑など)を明確に区別できる」(表4の⑤)の平均値が2.55から4.05に、「情報を検索する時、検索式(AND, OR, NOTなど)をよく使用する」(表4の⑩)は1.84から3.00に「検索の結果が多すぎる時に、検索結果を縮小するための方法をよく知っている」(表4の⑬)が2.86から4.07に、そして「検索の結果が不足の時、より包括的な結果を求めるための方法をよく知っている」(表4の⑫)の平均値が3.34から3.99になり、いずれの項目でも平均値の増加がみられた。

(III) 情報分析や評価

情報分析の領域では、「情報資料を入手する時、多様な方法(貸し出し、ダウンロード、図書館間貸し出しなど)をよく知っている」(表4の⑭)の平均値が2.90から3.87に、「結果が、自分の情報ニーズを解決するために有用であるのかをよく判断できる」(表4の⑮)が3.33から3.87に、「収集した情報資料の本文の内容を読んで、タイトル、抄録、キーワード、本文、結論などをよく区別できる」(表4の⑰)が2.90から3.87になり、いずれもプログラム終了前に比べて、肯定的な変化がみられた。

(IV) 情報利用

情報利用の領域では、「情報資料を入手する時、多様な方法(貸し出し、ダウンロード、図書館間貸し出しなど)をよく知っている」(表4の⑱)の平均値が2.66から3.85に、「情報資料に対する著作権の条件などをよく理解している」(表4の⑳)が2.38から3.87に、「情報資料に対する引用形式をよく知っている」(表4の㉑)が2.38から3.87に、「得られた情報資料を分類し管理することがよくできる」(表4の㉒)が2.86から3.74に増加した。

5. 結論

本研究は学部生を対象にして、情報リテラシー教育プログラムを設計、実践した後、その教育プログラムが学部生の情報リテラシーを向上させることに、いかなる影響を与えた

のかを検討した。

情報リテラシーの向上率の測定はプログラムの開始後と終了後に実施したアンケート調査を利用して行った。その結果、すべての領域で有意な差があることが確認でき、プログラムの効果が証明できた。

本研究の成果は、今後、韓国の大学で学部生を対象にした情報リテラシー教育プログラムを設計し、運営するための基礎資料として活用できると期待できる。

¹ ALA. Presidential committee on information literacy: Final report. American Library Association, 1989.

² Kim, Ji-Eun. A Study on the Development of the Information Literacy Curriculum Model for Undergraduates Based on Kuhlthau's Information Search Process (ISP) Model. Journal of the Korean Bibliography Society For Library And Information Science. 2011, vol. 22, no. 2, p. 101-122.

³ 四つの学会誌は、韓国図書館情報学会誌、韓国文献情報学会誌、韓国ビブリア学会誌、情報管理学会誌である。

⁴ 研究者によって、図書館利用教育などを情報リテラシー教育の一部として扱う場合がある。それらのキーワードを含めると118編になる。しかし、本研究ではそれらを含めなかった。

⁵ 1994年1件、1998年1件、2002年1件、2003年1件、2004年3件、2005年4件、2006年8件、2007年7件、2008年4件、2009年5件、2010年4件、2011年4件、2012年1件、2013年5件、2014年3件

⁶ Han, Mahn-Soung. An Alternative for the Enrichment of Information Literacy Instruction as a General Education. Journal of the Korean Society for Library and Information Science. 2014, vol. 48, no. 4, p. 51-70.

⁷ 未注1

⁸ ACRL. Assessing Student Learning Outcomes for Information Literacy Instruction Academic Institutions. American Library Association, 2003.

⁹ CAUL. Information Literacy Standards. University of South Australia, 2001.

¹⁰ 韓国では法律により、大学の授業を1年に30週以上、行うように決めており、多くの大学が15週間を一つの学期にしている。韓国高等教育法施行令第11条(授業日数)

¹¹ 質問が理解できず間違っただけで回答する可能性を排除するため、質問紙に書いた用語を理解できるようになってからアンケート調査を行った。